

# ロシア語圏における日本語教育支援

## 環境整備に向けて

—モスクワ市、アルマトゥイ市、ウラジオストク市での基礎調査—

稲垣 滋子、土井 眞美、仲矢 信介

### 要 旨

ロシア語圏における日本語教育で現在必要とされている事柄を知り、かつそれに基づいた支援内容及び支援方法を検討することを目的に、本年度 9 月に現地調査をおこなった。調査はモスクワ市、アルマトゥイ市、ウラジオストク市の 3 都市で実施し、7 大学 9 学部の日本語教育関係者と面談をおこなった。これらの都市における日本語教育は従来、歴史的経緯から、また、ロシア語が通用する国であるという理由から「ロシア語圏における日本語教育」としてひとくくりにして扱われることが多かった。しかしながら、今回の調査の結果、地域によって、さらには機関によって、学習者の学習動機や日本語使用環境に相違があり、そのため、教師の考える日本語教育に対する理念や教育目的、教育方法も大きく異なっていることが確認できた。今後は、今回の調査結果を参考に、それぞれの地域や機関の相違点を考慮に入れた支援環境整備に関して分析と検討を重ねていきたい。

【キーワード】ロシア語圏、異なり、学習目的、支援環境、IT

### 1. はじめに

ロシアにおける日本語教育は、18 世紀初頭に日本からの漂流民を教師として始まった。当時のロシアは西欧化と共に東方進出をも目指しており、日本との交易を開くための通訳養成が目的であった。それから 300 年間、革命時代からソ連邦崩壊の時期を通じて、通訳者・翻訳者養成は日本語教育の中核部分であり、これは今日でも続いていることである。通訳・翻訳するためには、日本語の文法・漢字・語彙の正確な理解と運用といった面が重要視されてきた。この伝統は現在も守られており、ロシア語話者教師による教授法は文法訳読法が中心のようである。日本語学習のための時間は長く、日本語を専攻している学部では、卒業時までの日本語の学習時間は 1,500 時間を超えている。

ロシアで作られた教科書は、上述の伝統に基づいたものが多い。ロシアで広く使われてきたゴロブニン初級～中級 3 巻本（文末の参考文献参照）をはじめ、最近ロシアで発行された総合的な日本語力を養う目的の日本語教科書、ネチャエワ、ストログワ・シェフテレヴィッチ（参考文献参照）は、文法事項・漢字・語彙が網羅され、理解と練習のための問題も豊富である。また中級教科書にはネチャエワ(参考文献参照)があり、これは初級と同様、文法・漢字・語彙

を発展させると同時に、話し言葉の表現を取り入れた点が特色と言える。一方、通訳・翻訳の能力養成に特化したものとして、ミーシナ（参考文献参照）は大学3年生以上に広く使われており、またヴィコワ（参考文献参照）も使われている。

以上は主教材であるが、日本で発行された教科書を使う場合のロシア語による文法解説書の作成も盛んで、『日本語初歩』のプレアヒナ・モルグンによる解説書（参考文献参照）は代表的なものと言える。

次に教師について述べれば、現在のロシア語圏では現地の言語を母語とする教師が中心となっている。日本人教師の派遣は90年代になってから組織的におこなわれるようになり、現在は、国際交流基金・日本外交協会からロシア・NIS諸国に11名、日露青年交流センターから、ロシアに18名が派遣されている（2002年3月現在）。

これまでのロシア語圏における日本語教育は、上記のように言葉の正確さを追求してきた。しかしながら、現在では日露の交流が多方面において盛んになってきており、さまざまな人間関係と場面に応じたスムーズなコミュニケーション活動をおこなう能力の育成に関する教育方法と教材の開発が急務となっている。通訳・翻訳においても同様である。そして、これらの開発をおこなう際の情報を、日本語教師全員が共有する方策の研究も必要である。

このような考えから、筆者らは文部科学省科学研究費の助成を受けて、平成13年度より、「ロシア語圏の中上級日本語学習者のためのシラバスの構築—シラバスの作成と構築のための継続的支援環境の整備—」（課題番号：13680349 研究代表者：土井眞美）をおこなっている。この研究の課題は、①現地でのニーズの調査と潜在的ニーズの掘り起こしの継続的な実施、②実施結果の分析とシラバスの作成及び効果的な教授方法の開発と提案、③提案する教授内容の現地への継続的な提供及び実施、実施結果に関する意見交換、及び、上記研究及び実践を可能にする支援環境作りの方法の開発である。

この研究の基礎調査としておこなったものが、本稿で報告する現地調査である。調査で得られた現地における日本語教育の実情や問題点を報告するものとする。

## 2. 今回の調査の概要

2002年9月15日から26日の日程で、モスクワ市(ロシア連邦)、アルマトゥイ市(カザフスタン共和国)及びウラジオストク市(ロシア連邦)の3都市において現地調査を実施した。3都市ともロシア語が通用している地域である\*1が、日本語教育の目的や目標の違い、学習時間数の制約、日本語専攻と第二外国語としての扱いの違い、施設や教授陣の違いといった理由から、日本語教育の内容の相違が予想される。各都市において調査を実施した教育機関は以下のとおりである。\*2

モスクワ市：モスクワ国立大学アジアアフリカ諸国大学\*3、国立モスクワ大学ジャーナリズム学部、モスクワ国立国際関係大学、モスクワ国立言語大学

アルマトゥイ市：アブライハン名称カザフ国際関係外国語大学、アルファラビー名称カザフ民族大学

ウラジオストク市：極東国立総合大学東洋学大学、極東国立総合大学国際関係大学、ウラジオストク国立経済サービス大学

調査の実施に際しては、まず面談の際の話題を事前に説明する目的で各教育機関の面談予定者にメールあるいは郵送によりアンケート調査票を送付した。現地調査では、各教育機関の日本語教師の代表者あるいは都合のつく教師全員と面談し、情報収集及び意見交換をおこなった。面談はすべて音声テープに記録した。なお、今回面談に参加できなかった教師にはアンケート調査票への回答と送付を依頼した。また、教授方法に関する情報を得るため、面談による調査に加え、アルマトゥイ市及びウラジオストク市の教育機関において授業見学をおこなった。いくつかの教育機関では、担当教師及び学生の許可を得てビデオカメラによる録画もおこなった。各教育機関における面談協力者及び授業見学協力者の名前は末尾に資料として掲載する。なお、本研究の成果をウェブサイトを通じて発信する予定であるため、IT 環境の調査を質問紙法と実験によって実施した。資料としてアンケート調査票と質問紙を末尾に添付する。

面談においては今回の調査目的を念頭に置き、以下の 4 点を中心に情報収集及び意見交換をおこなった。

- 1) 1 年生から 5 年生までの全体のカリキュラムの流れに関する情報を得ること\*4
  - 2) 日本語以外の言語を母語とする教師（本稿の場合はロシア語話者とカザフ語話者）と日本語を母語とする教師（以下「日本人教師」とする）の分担に関して情報を得ること
  - 3) 主教材に関する情報、副教材の利用の有無、副教材の利用方法に関する情報を得ること
  - 4) 日本語教育をおこなっていくうえで現在意識している問題点を知ること
- 次章では、実施した調査の結果を教育機関ごとに報告する。

### 3. 調査結果

今回はモスクワ市、アルマトゥイ市、ウラジオストク市の 3 都市において調査を実施した。以下、各都市における調査結果及び IT による情報提供のために実施した調査の結果を報告する。

#### 3. 1 モスクワ市における調査の結果

モスクワの高等教育機関のうち 9 大学 10 学部で日本語教育がおこなわれている。今回の訪問では 3 大学 4 学部で調査をおこなった。モスクワの特徴は、それぞれの機関で目的が異なり、それに伴って教育理念や教育方法が異なることである。また IT 関係の受信設備も、限られた教員が個人的に使っているところと、学生用に多数整備されているところがあった。また、教科書の開発に意欲的であり、主教材を作成する教師が複数いる。作成された教科書は、初級用の総合的なもの、中級用の総合的なもの、通訳・翻訳の能力養成のためのものなど多彩である。

その他モスクワでは、成人クラス、学校などの日本語学習者が増えてきた。日本大使館広報文化部では、毎月高等教育機関の教師の研究会と、成人クラス・年少者クラスの教師の教師会を開いている。今回、後者の教師会にも参加したが、以下には大学について記述する。

<モスクワ国立大学アジアアフリカ諸国大学日本語講座>

この大学は 1755 年にロシアで最初に創立された、古い伝統を誇る大学である。日本語教育は 1956 年に始まった。社会経済専攻、歴史専攻、文学・言語専攻の学生が二重専攻として日本語学科に属している。ここでは主として研究者養成と通訳・翻訳者養成を目的とした日本語

授業がおこなわれている。

教師は専任・非常勤を合わせてロシア語話者教師が 19 名と、国際交流基金・日本外交協会から派遣された日本人教師が 1 名である。ロシア語話者教師の担当は、学年別・クラス別であり、日本人教師は各学年の会話を担当している。学生数は合計で 100 名余で、日本語クラスは上記専攻別に編成されている。

主教材は、1・2 年生では長年ゴロブニン監修『日本語』3 巻本を使っていたが、最近では変わってきている。現在は、1・2 年生は当大学のロシア語話者教師作成の教科書、3 年生はロシア語話者教師作成の教科書、『東京』、4 年生は『Intensive Course』、『ニュースで学ぶ日本語』、5 年生は早稲田大学の『日本語 1・2』、『Adverbs in Japanese』、『Speaking Business in Japanese』、『インタビューで学ぶ日本語』が使われており、副教材としては、日本で作られた教科書やビデオ教材、新聞・雑誌記事、小説などがある。また通訳の授業では他大学の教師作成の教科書や当大学の教師作成の教科書が使われている。

この大学では上記の専攻に合わせた日本語の総合力を習得させることが主目標であるが、4 年生からは、通訳・翻訳の能力の育成を意識した授業がおこなわれ、通訳の実習も組み込まれている。また、大学院のコースで日本語教授法の授業もある。

なお、学生の日本との交流制度として、東海大学、創価大学、早稲田大学、竜谷大学との交換留学がおこなわれている。

今回の調査時には、特に意識化された問題点は指摘されなかったが、インタビューしている間に、学年論文や卒業論文を書く際には経済とか歴史などの専門教員と日本語教員との連携が必要だと感じていることがわかった。

#### <国立モスクワ大学ジャーナリズム学部附属日本センター>

1999 年から第二外国語としての日本語教育が始められた。目的は、ジャーナリストに必要な日本語力の養成にある。

教師はロシア語話者教師 2 名と、日露青年交流センターから派遣された日本人教師 1 名で、学年別に授業を担当している。

この学部の日本語授業は、自律学習につなげることを意識して文法項目・漢字・語彙を教えていることが特徴である。第二外国語としての日本語なので授業時間数は週 4 時間しかないが、その中で必要な教授項目を入れるようにしている。主教材として同大学アジアアフリカ諸国大学のロシア語話者教師作成の初級用教科書と『みんなの日本語 I、II』を使用している。面談したロシア語話者教師によれば、特に前者は文法項目などが網羅されており、文法項目、漢字、語彙の辞典としても有用であるとのことである。主教材のほかには、インターネットを利用して、新聞等から情報収集する練習をおこない、読んで理解できる能力を伸ばそうとしている。

問題点は、授業時間が少ないので教授項目のバランスを取るのがむずかしいこと、教材に関しては、入門期に大切な音声・アクセント教育のテープ教材、および初級から中級へのつながりがスムーズにいくような教材が必要なこと等があげられた。

#### <モスクワ国立国際関係大学国際関係学部日本語講座>

この大学は外交官養成を目的としており、日本語教育もその目的に合わせた目標を設定している。日本語講座は 1954 年に始まった。

教師数はロシア語話者が6名、日本人教師が1名で、この教師たちで、国際関係学部・国際経済学部・国際情報学部の3学部46名の学生を対象とした日本語講座を担当している。この日本人教師は国際交流基金から派遣されたロシア連邦教育アドバイザーが兼任している。担当のしかたは、学年別・技能別の両方である。技能別では、例えば1人が露和通訳、1人が聴解のように担当しており、日本人教師は各学年の会話を担当している。

主教材は、1・2年生は他大学のロシア語話者教師作成の初級用教科書、3年生は『日本を話そう』、4年生は『Advanced Japanese』である。副教材としては、新聞・雑誌の記事や各種ビデオ、教師作成の翻訳教材などを使っている。特に力を入れているのがインターネットを利用した視聴覚教材の開発で、現代の日露関係を扱ったテレビ番組を教材化したものを使って、外交官に必要な知識の蓄積と高度な語学力の養成に力を入れている。

この大学の特徴として、IT関連の機器の充実があげられる。パソコン40台を設置した教室があり、学生たちは日本から直接情報を得ることができる。

日本語の授業の目標は、高度な文法事項・漢字・語彙を習得すること、日本に関する情報の理解を中心としており、時間数の関係から、日本語の文章作成など外交官の仕事にそれほど必要のない技能の習得には力を入れている点特徴的である。日本語能力試験の級は、卒業時に1級合格を目標としている。

日本の大学との交流では、国際基督教大学および静岡県立大学との交換留学制度がある。

今回インタビューした限りでは、この大学では特に問題点として意識している事柄はないようである。目的・目標がはっきりしており、その目標に向かって時間数に合わせた授業内容を決めていることが強調されていた。

#### <モスクワ国立言語大学通訳翻訳学部日本語学科>

ここでは、ロシアと日本の両文化に関する知識を身につけ、それらを高度な語学力を用いて通訳・翻訳する能力を養うことを目的としている。

日本語学科は1990年に設立された。現在9名のロシア語話者教師がいる。去年は現地在住の日本人の非常勤講師が1名いたが、今年度はまだ手当てできていないとのことである。日本語の授業は各教師が1つの学年を担当し、1つのクラスは3~4名のチームティーチングをおこなっている。1学年の学生数は平均5~8名であるが、一時的に10名を超えることもある。

日本語授業のほかに、日本言語学、日本研究、日本語翻訳通訳論、和露翻訳、露和翻訳、通訳などの専門科目があり、それぞれ担当の教師が決まっている。

日本語クラスは、5年間、初級から上級まで、文法・漢字・語彙・読解・聴解・会話・作文から成っている。翻訳・通訳関係の科目は3年生から始まる。

主教材は、1年生が『日本語初歩』、2年生が『総合日本語中級』・『初級から中級』、3年生はこれまで『現代日本語コース中級1』であったが、今年度は『文化中級日本語1』、4年生はやはりこれまでの『現代日本語コース中級2』に代わって『文化中級日本語2』、5年生が『上級で学ぶテーマ別日本語』である。このほか副教材として、『毎日の聞き取り』、『日本語でビジネス会話』、『文化エピソード』、『ニュースで学ぶ日本語』、新聞・雑誌の記事等が使われている。

この学科では、目標を通訳・翻訳者の養成に特化しているため、日本語の授業でもそのため

の基礎学力をつけていくこと、コミュニケーション的な方法を取り入れていることが特徴となっている。日本語の授業と通訳・翻訳クラスの違いは、例えば翻訳を1年生からも課すが、その目的は基礎段階では文法の理解ができているかどうかの確認のためであり、一方翻訳と通訳の授業では、通訳・翻訳理論に基づいた技能と方略の獲得に重点が置かれていることである。この授業で使われている教科書は、当大学の教師が上記の通訳・翻訳理論に基づいて作成したもので、他の機関でも広く使われている。

問題点としては、交渉場面を想定した上級の通訳・翻訳の教材がないこと、発話意図を読み取るような通訳・翻訳の練習がもっと必要なこと、その教材の開発が急がれること等があげられた。

### 3. 2 アルマトゥイ市における調査の結果

カザフスタン共和国の教育機関で初めて日本語専攻科が設置されたのは独立の翌年の1992年で、日本語教育の歴史はまだ10年と短い。アルマトゥイ市では現在8つの機関において日本語教育が行われているが、今回はこのうち、アブライハン名称カザフ国際関係外国語大学及びアルファラビー名称カザフ民族大学の2機関においてそれぞれの機関の日本語教育関係者と面談の機会を得ることができた。両機関とも日本語を主専攻として教える高等教育機関である。調査の結果、2機関に共通する特徴として次の3点が明らかになったが、いずれも今回調査を実施した他の2都市における日本語教育とは異なる点と言える。

1)ほとんどの学年において2~3クラス制をとっているが、クラス分けは初等中等教育機関において教育を受けた言語によるもので、「カザフクラス」と「ロシアクラス」に分けられる。学生の国籍とは必ずしも一致しない。なお、カザフ語と日本語は類型論的に類似した特徴を有しており、日本語はカザフ語話者にとって学習しやすい言語のひとつにあげられる。

2)日本語を主専攻として学習する学生の多くは、道具的動機づけが強く、教師となることや日本企業への就職を目指している。もっとも、現在、中国や韓国の企業に比べ、日本企業の同市への進出は未だ活発ではなく就職の機会は少ない。また、教職に就く機会も限られており、今後日本語を主専攻とする学習者数の伸びの低下が懸念される。

3)一方で、上記とは対照的に、第二外国語として日本語を履修する学生数が増加している。日本の経済や経営方法、最新技術に対する関心が学習動機となっている。

なお、同市滞在中に日本語教師会の定例会が開催され、参加することができた。アルマトゥイ市の日本語教育機関に所属するほとんどの教師が会員となっており、月1回定期的に開催されている。各教育機関の教師の間で情報交換及び討議が活発におこなわれていた。

以下、機関ごとに調査結果をまとめる。

#### <アブライハン名称カザフ国際関係外国語大学東洋言語学部東洋学科>

当初日本語は東洋言語学部で第二外国語科目として教えられていたが、1998年に日本語専攻コースを含む東洋学科が新設され、主専攻として教えられるようになった。教師養成を第一の目的としており、5年生のカリキュラムには教育実習も含まれている。英語あるいは中国語を副専攻として選択する。現在1年生から5年生まで約60名が教育を受けており、今年度初めての卒業生を出す。日本語教育を担当する教師は8名で、うち5名は日本人教師で

ある。2名は今年の9月から、3名はこの大学で教え始めて3年目に入るそうであるが、日本人日本語教師の占める割合が高いこと、また比較的年齢の高い日本人教師が多いことがこの機関の特徴のひとつとしてあげられるだろう。担当は学年別となっており、高学年に関しては主に日本人教師が担当している。1年生、2年生前半で『みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ』、2年生の後半から3年生で『表現文型Ⅰ、Ⅱ』、4年生では『文化中級日本語』、5年生は『上級で学ぶ日本語』を主教材として採用している。学年別に日本語能力試験を到達目標としていること、また学年別の主な教科書は紹介してもらったが、時間的な制約もあり、全体のカリキュラムや学年別の具体的な教授項目、教授方法については詳細な説明を聞くことができなかった。学年別に担当が違うこともあってか、授業に関する教師間での情報交換はあまりおこなわれていない様子であった。

問題点としては、卒業生が日本語関連の仕事に就ける可能性が少ないこと、日本への留学の機会が極端に少ないこと\*5、日本語教育関連の教材の不足、設備の不十分さや備品の不足、日本からの援助の削減等、教育環境に関する言及が多かった。また、面談の際には発言がなかったが、アンケートによる調査結果からは授業に役立つ素材や教科書、技能別教育の指導方法に関する情報を希望する回答もあった。ITによる情報配信に関しては、若者に関する情報や時事ニュースを含むニュース、映像の配信を望む声が大きかった。

#### ＜アルファラビー名称カザフ民族大学東洋学部極東学科日本語専攻科＞

現在1年生から5年生まで96名が日本語を専攻している。カザフスタン共和国で日本語教育が初めて導入された機関である。学生の専攻形態はここ3年毎年変わっており、2002年9月入学の日本語専攻科の学生は大学側の指定により全員が東洋学専攻となった。専攻科目の学習は3年生から始まる。日本語関連の授業は現在カザフ人教師8人と日本人教師3人が担当している。カザフ人教師は全員同大学の卒業生である。学年毎に主教材の文法項目及び技能別教授項目を到達目標として設定しており、また、日本語能力試験も学年別の到達目標に組み入れている。主教材の指導から始め、高学年では通訳・翻訳や論文作成等の技能別指導、形態論や統語論、語彙論等の専門教育指導もおこなう。また、5年生後期では6週間の教育実習及び指導を実施している。今年から主教材を『みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ』に変更した。主教材は主にカザフ人教師が担当し、主教材に関連した会話や作文の授業を日本人教師が担当している。高学年になるほど日本人教師が担当する授業数が増えるが、カザフ人教師も技能別教育や専門科目の指導を分担しておこなっている。クラス別担任制を採用している。各学年必ず日本人教師が1コマ以上の授業を担当するようにしており、学年ごとに担当のカザフ人教師、日本人教師全員が話し合って授業を進めている。教師間の連携は強い。この機関のもうひとつの特徴としては、ロシア語あるいはカザフ語等の媒介語を使った説明を極力抑え、なるべく直接法で授業をおこなっている点があげられる。カザフ語と日本語との類似性から、ロシア語を介した教授方法が却って遠回りになることも理由として考えられる。現在日本語を指導しているカザフ人教師もその多くが直接法で日本語を学習した経験を持っている。

問題点としては、学生の留学の機会に関する問題に加え、翻訳や聴解、会話等の技能別指導方法に関する情報や専門科目を指導する際の文献の不足等、教授方法や教授内容に関わる情報収集の難しさが指摘された。ロシア語や日本語で書かれた文献はあるものの、内容が専門的過

ざる、あるいは難解すぎるものが多く、学生の教材としても教師のための参考文献としても適当とは言えない。また、直接法で日本語を習得したカザフ人教師が日本語を指導する際の参考資料として、カザフ語で書かれた初級文法解説書作成の必要性にも話が及んだ。

さらに、第二外国語として日本語を指導する教師からは、日本語能力試験 3 級くらいの日本語力でも読め、かつ学生の興味に応えられるような読解素材の配信を望む声が聞かれた。

### 3. 3 ウラジオストクにおける調査の結果

ウラジオストクは、全体として口頭表現を重視し、そのための練習を盛んにおこなうこと、日本で作成された教科書を利用し、そのロシア語解説が副教材としていくつか作られていることが特徴である。ここでは、極東国立総合大学東洋学大学日本学部、同大学国際関係大学国際関係学部外国語講座、ウラジオストク国立サービス・経済大学において調査をおこなった。以下、それぞれについて述べる。

#### <極東国立総合大学東洋学大学日本学部>

日本語を専攻とし、19世紀以来の長い歴史を持つ大学である。学生たちは日本語と二重専攻で日本語日本文学、日本経済、地域研究の専攻に分かれて学んでいる。学生数は、学部が合計250名余、大学院\*6が25名以上、確認した限りではロシア連邦最大の日本研究・教育機関である。日本語の授業数は、1年生週に14時間、2年生14時間、3年生12時間、4年生10時間、5年生12時間（前期）で、合計1868時間である。

カリキュラムは、95年頃大枠が確立した内容で、新教材の開発とともに少しずつ改良が試みられている。学習目的は通訳・翻訳と日本学で、実践的な日本語が重視され、そのあらわれとして口頭練習が盛んにおこなわれている。学年ごとの大まかな流れを主教材によって示すと、1年次に他大学のロシア語話者教師作成の初級用教科書と『みんなの日本語』『日本語初歩』、2年次で『日本語表現文型』、『日本語中級読解入門』、その他生教材、3年次で『現代日本語コース中級』とその他の生教材、ビデオ教材が用いられ、4年次以降は生教材中心となる。

ゴロブニン編『日本語』（1971、1973）は近年では主教材として利用されることはなく、一部を文法の参考書として利用するのみである。ロシア語話者教師と日本人教師との分担は、後者の役割が、「口頭表現」というクラスにおいて、学生に、より「日本語らしい」日本語のモデルを示すことが求められていることである。『日本語初歩』については、協同して授業がおこなわれ、日本人教師は会話を担当し、ロシア語話者教師は同教科書の練習と文法を担当している。原則として全学年、全クラスに日本人教師の授業がある。日本人教師は全23名のうち5名である。ロシア語話者教師と日本人教師とは、前述した『日本語初歩』の授業以外はそれぞれ独立して別の教科書や教材で授業をおこなっている。

副教材は、教師が、主教材に不足すると判断する要素について、ロシア語による文法解説や註釈、ロシア語訳などを作成することが多い。同大学の2人のロシア語話者教師がそれぞれ国際交流基金の助成で新しい教科書を出版し、学内で利用されている。前者は日本の中級教科書に沿って解説と訳をつけたもの、後者は朝日新聞の多数の記事に註釈と訳をつけたものである。

問題点としては、一時的な現象とは言え、教師の病気療養や退任などで、教師数が不足し、



一部のクラスでは30名近い学生数になっていることが指摘された。

#### <極東国立総合大学国際関係大学国際関係学部外国語講座>

1996年に東洋学大学を卒業した若い教員たちを中心に日本語の授業が開始された。日本語は第二外国語のひとつである。現5年生までは3年前期から日本語の授業がおこなわれ、現4年生以下は1年前期から授業がおこなわれている。教師数は5名、うち日本人教師は日露青年交流センター派遣の1名である。

現在までに、『みんなの日本語』を主教材として3年次に初級を終わらせることについては合意が成立し、その大枠の中で、教授項目は教師ごとに設定され、それぞれに授業が進められている。初級終了後については検討中である。目標を明確化して、卒業時までには、日本語能力試験2級合格を目指そうとする動きもある。ロシア語話者教師と日本人教師は、同じ教材を用いているが、クラスごとの担当制で独立して授業をおこなっている。副教材については、それぞれの教師の判断で、技能別に主教材を補う形で利用されている。問題点としては授業時間数の少なさが指摘された。

#### <ウラジオストク国立サービス・経済大学>

1996年と97年に、東洋学言語学部、言語学部、社会サービス・ツーリズム学部の3つの学部で相次いで日本語コースを開設した。東洋学言語学部が主専攻、他の学部が副専攻である。さまざまな事情から責任者、教師の入れ替わりの時期を迎えており、今回は正確に全体を把握しえなかった。

### 3. 4 ITによる情報提供のために

本研究の成果の発信をウェブサイトを通じておこなうところから、現地の通信環境とコンピュータ・インターネット使用状況を実験と質問紙調査の2つの方法によって調べた。ただし今回実験をおこない得たのはウラジオストクのみである。

#### 1)ダウンロード・ウェブサイトの閲覧における実験結果

市内のホテルから、日本から持ち込んだノートパソコン（Windows98、pentium3、450MHZ、メモリー192MB）を用い、現地プロバイダーのインターネット・カードによってインターネット接続し、ファイルのダウンロード速度を見たところ、27kbから33、6 kbの間であった。また、さまざまなウェブサイトを閲覧し、通信の体感速度を測ったところ、画像の多いページの閲覧は日本のADSL、学内LANなどに比べて読み込みに時間がかかり、快適に閲覧することは困難であった。これに対し、テキスト中心のサイトの閲覧はスムーズであった。原因不明の切断と接続不能も多い。

極東大学日本学部の学内LANにおいても同様の試験をおこなったが、ホテルのダイヤルアップ接続と変わらないスピードであった。なお、同大学では、日本語が読み書き可能で学生が自由に使えるパソコンは10台である。この点モスクワ国立国際関係大学は、同様のパソコンは40台であった。

#### 2)質問紙調査の結果

コンピュータやインターネットへの関心を探り、本研究の方向を確認するため、質問紙調査をおこなった。回収し得たのはモスクワで5、ウラジオストクで11である。紙幅の都合で

項目の列挙はできないが、平均的な結果を述べると、使われているOSはほとんどがロシア語版Windows98、同XPのどちらかであり、ソフトはOffice98～XPをはじめとするMicrosoft社のものが多く、通信速度への満足度は平均的に低かった。また、中高年の教師は、「ほとんど使わない」「まったく使わない」という回答（口頭も含む）が半数程度であった。

さらに、ロシア語ではパソコンを使っているが日本語では使っていない教師のために、「ロシア語OSのパソコンでも、簡単な操作で日本語が使えるようになるが、可能なら使いたいか」という項目を立てたところ、ロシア語環境のみのパソコンを持っている教師7名全員が、使いたいと回答した。なお、アルマトゥイ市では、他の2都市と違い、個人使用が進んでいないようであった。

#### 4. まとめと今後の展望

以上、3都市の実情について述べてきた。歴史的経緯から、また、同じ旧ソビエト連邦に属しているという理由から、日本語教育に関しても「ロシア語圏」というくくり方をされがちであるが、今回調査をおこなった3都市では、地域によって、また機関によって、日本語教育に対する理念や目的、教育方法が異なっていると同時に、情報化の進行状況もさまざまであることが確認できた。ただし、どんな日本語を教えるかについては、文法的に正しい日本語であるべきだと考えられている点は、ほぼ全機関で共通であった。漢字重視も同様である。

ここで、教育目的を軸に、地域や機関の相違点についてまとめておきたい。詳しくは各都市や機関の項を見ていただきたい。なお、大学名は簡略に示すこととする。

##### 1)日本語の専門家養成を目的とする場合

総合大学ではこの目的を掲げるところが多いが、機関によって理念や教育方法が異なる。日本語との二重専攻として言語・文学、経済、歴史を学ぶモスクワ大学では、専攻する分野の研究に必要な理解力をつけるために、文法と読解に重点を置いている。対照的に、実践的な日本語力の育成を目指すウラジオストクの各大学では、口頭表現を重視している。また教師養成を目的とするカザフの大学では、教育実習を課しており、大学によって他の外国語を副専攻として選択させたり、専門科目を重視したりしている。カザフの特徴として、ロシア語を介さない日本語教育の方向が注目されており、直接法が一部取り入れられていること、学習者の得意な言語（ロシア語かカザフ語か）によるクラス分けをしていることがあげられる。

教材開発については、モスクワでは、後述の通訳・翻訳者養成を含めて、教育目的に合わせたものを作成していること、ウラジオストクでは日本で発行された教科書の解説書を作っていることが特徴的であった。

問題点としては、専門科目の教師と日本語教師の連携方法、カリキュラムの変更による授業計画の見直しの必要性、教授方法に関する情報の不足、現地教師と日本人教師との分担方法、日本語力を生かした就職口が少ないこと等があげられる。

##### 2)通訳・翻訳の専門家養成を目的とする場合

通訳・翻訳者養成に目的を特化しているのはモスクワ言語大学である。ロシア語と日本語間の通訳・翻訳の能力育成にあたっては、理論と実際の両面を重視していること、日本語の

初級クラスから将来の通訳・翻訳を目指してコミュニカティブの方法をとっていることが特徴である。問題点としては、日本人教師がいないこと、上級の通訳・翻訳教材の開発が遅れていることが指摘された。

また通訳・翻訳能力の育成を日本語教育の目的の一部としている大学は多い。今回調査したほとんどの機関でも、実用面で役立つ通訳・翻訳者を育てるための授業がおこなわれていた。

### 3) 外交官養成を目的とする場合

外交官養成が目的となっている機関としてモスクワ国際関係大学がある。ここでは特に現代日本社会の理解のために、IT を利用した教材開発や日本語授業が進んでいる点が特色である。全体に日本語の高度な理解力と運用力を目指しており、特に問題点は指摘されなかった。

### 4) 第二外国語としての日本語の場合

今回の調査対象の中ではモスクワ大学ジャーナリズム学部と極東大学国際関係学部がこれにあたる。問題点は授業時間数の少なさである。これに対する取り組みは、モスクワ大学では教授項目をすべて提示しておいて、学生があとから検索して勉強できるようにしており、極東大学では、大枠を決め、あとは各教師にまかされるという形でおこなわれている。

以上のように、目的の違いにより、また同じ目的でも機関により、多様な日本語教育がおこなわれていることが確認できた。

教師の取り組み方も、目標をはっきり設定して迷わず進んでいる場合と、試行錯誤を繰り返している場合とがあった。こうしたさまざまな相違の根底には、教師側のニーズの認識、教授方法に関する知識と経験の違いがあることも関係していると思われる。また、教師の分担のしかたで日本人教師が会話を担当する機会が多いが、その際、教師自身が話し言葉教育に関する教授項目を客観的に記述していく姿勢を持つ必要があることがわかった。

さらに、IT を通じた情報提供にあたっては、以下の点に注意する必要がある。まず、IT になじみの薄い教師のために、日本語教育上の情報と同時に、基礎的な IT 技術・知識の提供もおこなう必要がある。場合によっては紙媒体を活用することも考えられる。また、ロシアの平均的な通信速度にかんがみ、スムーズに閲覧やダウンロードが可能のように、素材は可能な限り軽くすることが必要である。さらに、ロシア語環境のパソコンで日本語を使う方法について、具体的にウェブサイトあるいは紙媒体で伝えた方がよい。各地のそれぞれに異なったニーズに応える必要については、ウェブサイトを用いることそれ自体が、ことを進めやすくしているといえる。紙媒体よりも即応性や異なるニーズに応える個別対応性において優れているからである。

このように、日本語教育に関して、地域・機関をロシア語圏として同じような扱い方をすることはできず、必要とされる支援の内容や方法も異なってくるのが予想される結果となった。

以上のことから、今後の研究の方向として、次のことが導かれるであろう。

- 1) 話すことに関する教育や読解教育を中心とした技能別教育の教授内容及び教授方法の開発
- 2) 主教材としての教科書の効果的な使用方法及び副教材の利用方法の提示

### 3)情報提供の環境整備

これらについて、さらに調査研究を進めていき、地域差・機関差をふまえた日本語教育のありかたについて検討していきたい。

### 謝辞

今回の調査実施にあたり、萩原幸子氏(国際交流基金派遣ロシア連邦日本語教育アドバイザー)には大変お世話になった。ここに改めて感謝の意を表したい。

\* 本稿の執筆分担は以下のとおりである。

第1章：稲垣、土井、第2章：土井、稲垣、第3章 1 節：稲垣、2 節：土井、3、4 節：仲矢、第4章：稲垣、土井、仲矢

### 注

\*1 現在、カザフスタン共和国では自国言語であるカザフ語の使用が強力に推進されている。今回面談を行った教師の中にもカザフ語や中国語を母語とし、ロシア語を得意としない教師がいた。

\*2 モスクワ市及びアルマトゥイ市では日本語教師会にも調査を依頼し実施したが、日本語教師会での調査結果は本稿には含めていない。

\*3 「国立モスクワ大学アジアアフリカ諸国大学」のような表現は日本ではなじみが薄いだが、ロシアの制度では、学部が研究レベルにおいてある水準に達すると、大学に昇格することになっている。したがって意識するなら「上級学部」であろう。

\*4 一部4年制に移行しつつあるが、今回調査した機関では5年制を採用している。

\*5 東洋言語学部東洋学科には他に中国語専攻コースや韓国語専攻コースがある。学科長の話では、中国や韓国が多くの留学生を受け入れているのに比べ、日本への留学生は年間1~2名と極端に少ない。

\*6 日本語、日本文学、日本経済、世界史(日本史)の専攻を有し、1995年に発足した。

### 参考文献

- (1) 木谷直之(1998)「極東ロシアの大学生の言語学習観について—海外日本語教師研修のための基礎データ作成を考える—」『日本語国際センター紀要』第8号 国際交流基金日本語国際センター
- (2) 国際交流基金日本語国際センター(2002)『日本語教育国別事情調査 ロシア・NIS 諸国日本語事情』
- (3) 島田徳子、古川嘉子(2002)「インターネットを利用した日本語教師の教材制作支援—教師の実践に基づいた内省を促す CSCL 環境の構築」『2002年度日本語教育学会秋季大会予稿集』(pp. 196~201)
- (4) 日露青年交流センター(2001)『第3回日本語教師支援事業帰国報告』
- (5) И.В.ゴロブニン監修『日本語』(原題はロシア語、初~中級、3巻本)モスクワ

- (6) M.ミーシナ (1995) 『中級における和露・露和通訳』モスクワ
- (7) Л.Т.ネチャエワ (1994、1996) 『日本語』(中級用) 1, 2 モスクワ
- (8) Л.Т.ネチャエワ (2001、2002) 『日本語』(初級用) 1, 2 モスクワ
- (9) Л.В.プレアヒナ・З.Ф.Моргун (1998) 『日本語初歩文法説明書』(原題はロシア語)ウラジオストク
- (10) E.B.ストロゴワ・H.C.シェフテレヴィッチ (2002) 『日本語で読み書き話そう』(原題はロシア語、2巻本)モスクワ
- (11) С.А.ヴィコワ (1999) 『日本語通訳法』モスクワ

#### 参考資料

- (1) 小林誠「極東国立総合大学国際関係学部における日本語教育の現状」内部資料、2002
- (2) 重友亜希子「日本語教育事情アンケート」内部資料、2002
- (3) シュヌイルコ・アレクサンドル「極東国立総合大学日本学部教授内容」内部資料
- (4) マリーナ・ミーシナ (2001) 「教育実践レポート17 モスクワ国立言語大学における翻訳・通訳者の養成」『日本語教育通信』41号、国際交流基金日本語国際センター、(pp. 3~5)
- (5) ユーラシア協会日本語委員会 (2002) 「旧ソ連日本語教師シンポジウム レジメ&資料」

資料1 面談協力者リスト

協力者名(敬称略)	実施教育機関	付記情報
<モスクワ市>		
ヴィコワ ステラ マエフスキ エヴゲニー	モスクワ国立大学アジア アフリカ諸国大学	日本語学科長
ベソノワ エレーナ	国立モスクワ大学ジャー ナリズム学部	
グレヴィチ タチヤーナ ラズドルフスカヤ ナターリヤ	モスクワ国立国際関係大 学	日本語学科長
ミーシナ マリーナ	モスクワ国立言語大学	日本語学科長
<アルマトゥイ市>		
パク・ネリ	アブライハン名称カザフ 国際関係外国語大学	東洋言語学部東洋学科 長
カジタイ・アヌアル、 アブドラ・グルナズ、 水谷晴信、曾我豊、野田幸雄、 滝澤文一、藤縄美栄子	同上	東洋言語学部東洋学科 日本語専攻コース教師
大庭佐知子、樋口敬一	アルファラビー名称カザ フ民族大学	東洋学部極東学科日本 語専攻科教師
シャダエヴァ・マディナ、 アルプスバエヴァ・ダミラ、 ジュシポヴァ・アイマン、 ボランクロヴァ・サマル、 リスペコヴァ・ナジラ、 ショリナ・ダリヤグル、 アルティバエヴァ・アルマグル	同上	同上

資料1 面談協力者リスト（続き）

＜ウラジオストク市＞		
シュヌイルコ・アレクサンドル コルビナ・リュドミラ プレヤヒナ レヴァニードフ パブロフ・アレクセイ 工藤 久栄 山田光子 クチェルク・ジャネット	極東国立総合大学東洋学 大学日本学部	日本学部長 日本学部副学部長
スレイメノヴァ・アイーダ チェルトウーシュキナ・エフゲー ニヤ 小林誠	極東国立総合大学国際関 係大学	
パンテレーエフ・セルゲイ 重友亜希子 ボプロバ・オリガ	ウラジオストク経済・サ ービス大学	東洋言語語学部長

資料2 授業見学協力者リスト

協力者名(敬称略)	実施教育機関	付記情報
大庭佐知子	アルファラビー名称カザ フ民族大学	3年生カザフクラス
コルビナ・リュドミラ プレヤヒナ クチェルク・ジャネット パブロフ・アレクセイ	極東国立総合大学東洋学 大学日本学部	1年生日本経済クラス 2年生日本経済クラス 4年生日本経済クラス 3年生地域研究クラス
チェルトウーシュキナ・エフゲ ーニヤ	極東国立総合大学国際関 係大学	3年生国際関係学部クラ ス
ボプロバ・オリガ	ウラジオストク国立経 済・サービス大学	2年生東洋言語語学クラ ス

### 資料3 ニーズ調査用アンケート用紙

(\*日本語版及びロシア語版を作成したが、ここでは日本語版のみを掲載する。)

「ロシア語圏日本語教師にとって必要なことがらは何か」に関するアンケート

私どもは、ロシア語話者に対する日本語教育について研究をしており、このたび、文部科学省から科学研究費を得て、「ロシア語圏の中上級日本語学習のためのシラバスの構築—シラバスの作成と構築のための継続的支援環境の整備—」という課題に取り組んでいます。この研究の目的は、ロシア語圏での日本語教育で必要としているシラバスや教授方法の開発と、その成果の提供です。

このような目的のために、ロシア語圏で日本語を教えていらっしゃる先生方ご自身のご意見を聞かせていただきたく、このアンケート用紙を用意しました。

お忙しいところをまことに恐れいたしますが、以下の質問にお答えくださるようお願い申し上げます。お答えは日本語・ロシア語のどちらでも結構です。いただいたご回答の扱いには、先生方のご迷惑にならないよう細心の注意を払います。また、この調査の結果で先生方の役に立つと思われることがらは、当研究会が開設するホームページで随時提供していきたいと考えています。

回答用紙は、本年九月末日までに同封の封筒に入れて投函していただければ幸いです。国際返信切手を同封いたしますので適宜ご利用ください。なお、ご回答はメールでくださっても結構です。(アドレス: nichiro@abox8.so-net.ne.jp)

以上のことについてどうぞよろしくご協力くださいますようお願い申し上げます。

2002年8月

ロシア語圏日本語教育研究会  
(研究代表者: 土井真美)



「ロシア語圏日本語教師にとって必要なことがらは何か」に関するアンケート

記入年月日：2002年\_\_\_\_月\_\_\_\_日

記入者氏名：(ロシア文字) \_\_\_\_\_  
(カタカナ) \_\_\_\_\_

所属機関： \_\_\_\_\_ (専任・非常勤)  
(電話・FAX・e-mailなど連絡方法 \_\_\_\_\_)

あなたにとっての日本語は次のどれにあたりますか。

( 母語 ・ 第一言語 ・ 第二言語 ・ 外国語 ・ その他 \_\_\_\_\_ )

- 1 今どこで日本語を教えていますか。複数の機関で教えている場合はすべて書いてください。学校名をお答えください。大学の場合は学部も書いてください。

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

- 2 日本語を教えた経験は全部で何年ぐらいですか。 \_\_\_\_\_年

- 3 どこで何年間ぐらい日本語を習いましたか。学校名と期間を書いてください。

\_\_\_\_\_

- 4 学生時代の専攻は何でしたか。 \_\_\_\_\_

- 5 現在特に研究している領域があったら書いてください。

\_\_\_\_\_

- 6 大学で日本語の教授法に関する授業を受けたことがありますか。 [ある・ない]

- 7 日本語教授法に関する研修を受けたことがありますか。 [ある・ない]

「ある」と答えた方へ。いつ : \_\_\_\_\_、 どこで : \_\_\_\_\_、  
期間 : \_\_\_\_\_ (年・か月・週間)、 内容 : \_\_\_\_\_

8 現在担当している日本語クラスは何ですか。すべて書いてください。

音声・アクセント・イントネーション、文字（漢字）、文法、読解、  
聴解、会話、総合、通訳・翻訳など



学年	一週間に	内 容	教 科 書	人数
	時間			

9 今までに教えたことのある授業内容はどれですか。わかる範囲で書いてください。

音声・アクセント・イントネーション、文字（漢字）、文法、読解、  
聴解、会話、総合、通訳・翻訳など



学年	一週間に	内 容	教 科 書	人数
	時間			

10 日本語を教える場合の、得意なところと不得意なところは何ですか。

(得意なところ) \_\_\_\_\_

(不得意なところ) \_\_\_\_\_

11 今までに教科書を作ったことがありますか。〔ある・ない・手伝った〕

作ったことがある方への質問：いつ：\_\_\_\_\_、  
どこで：\_\_\_\_\_、

教科書名：\_\_\_\_\_

対象となる学習者：\_\_\_\_\_

教科書を作成中の方への質問：いつ：\_\_\_\_\_、  
どこで：\_\_\_\_\_、

教科書名：\_\_\_\_\_

対象となる学習者：\_\_\_\_\_

教科書を作る予定がある方への質問：いつ：\_\_\_\_\_、  
どこで：\_\_\_\_\_、

教科書名：\_\_\_\_\_

対象となる学習者：\_\_\_\_\_

12 授業に必要な副教材を作っていますか。〔作っている・作っていない〕

作っている場合、それはどんなものですか（単語表、ロールカード、漢字練習帳など  
具体的に書いてください）。

---

13 今困っていること、また希望したいことについてお尋ねします。あてはまるものすべてに○をつけたり、書き込んだりしてください。

(1) 日本語を教えるにあたってもっと必要だと思われるもの

( ) よい教科書 → \_\_\_\_\_ を教えるときによい

( ) 副教材 → \_\_\_\_\_ を教えるときによい

( ) 授業に役立つ素材 → カセットテープ、ビデオ、写真、映画、CD、  
ソフト、その他 \_\_\_\_\_

( ) 授業のためのシラバス作りのヒント

( ) 教室活動に関するヒント → 特に \_\_\_\_\_ について

( ) 音声・アクセント・イントネーションの指導のしかた → (工夫している  
ことがあったら書いてください) \_\_\_\_\_

( ) 文字・漢字の指導のしかた → (工夫していること) \_\_\_\_\_

( ) 文法の指導のしかた → (工夫していること) \_\_\_\_\_

- ( ) 文法の指導のしかた → (工夫していること) \_\_\_\_\_
- ( ) 読解の指導のしかた → (工夫していること) \_\_\_\_\_
- ( ) 聴解の指導のしかた → (工夫していること) \_\_\_\_\_
- ( ) 会話の指導のしかた → (工夫していること) \_\_\_\_\_
- ( ) 通訳・翻訳の指導のしかた → (工夫していること) \_\_\_\_\_
- ( ) 設備や備品が必要 → (例えば、LL 教室、教室用パソコンなど) \_\_\_\_\_
- ( ) 特に困っていることはない
- ( ) その他 \_\_\_\_\_

- (2) 役立つ情報の収集や意見交換の機会について、必要だと思われること
- ( ) 日本語教育の現状に関する情報 → (例えばインターネットを通じてなど具体的なことがあったら) \_\_\_\_\_
  - ( ) 授業や、授業の準備について相談する人・窓口
  - ( ) 他機関の日本語教師との交流・意見交換の機会
  - ( ) ロシア・CIS 諸国の日本語教師との交流・意見交換の機会
  - ( ) 日本や世界の日本語教師との交流・意見交換の機会
  - ( ) 当地の日本人、あるいは日本の社会との交流
  - ( ) 日本からの派遣教師との協力のしかたについての助言
  - ( ) その他 \_\_\_\_\_

14 その他、私どもの研究グループに望むことがあったら、自由にご意見を書いてください。

ご協力ありがとうございました。

#### 資料4 IT環境調査用質問用紙

(※今回の調査では日本語版のみ作成し、各調査地での面談者に記入を依頼した。)

先生方へお願い

わたしどもの研究会では、ロシア語話者への日本語教育に携わる人々に役立つ上記ウェブサイトの内容を現在構築中です。つきましてはサイトを最大限役立てていただけるよう、以下のアンケートにお答えいただければ幸いです。

よろしく願いいたします。

土井眞美・稲垣滋子・仲矢信介

#### 1 お勤め先とご自宅のコンピュータ環境についてうかがいます。

##### (1) 日本語を使えるコンピュータがありますか。

- 勤め先にも自宅にもある
- 勤め先にはあるが自宅にはない
- 勤め先にはないが自宅にはある
- どちらにもない

##### (2) (1)で「ある」とお答えの方にうかがいます。そのコンピュータについて、ご記憶の限りでお答えください。お勤め先にもご自宅にもある場合は、主としてお使いになるほうについてお答えください。

- 1 OS (Operating System) は Windows (95 98 2000 XP)  語版  
Macintosh (OS7 8 9 X)  語版  
その他 ( )
- 2 文書作成に使うソフトは Word (97 98 2000 XP)  
一太郎 (8 9 10 11 12)  
その他 ( )
- 3 表計算・グラフ作成に使うソフトは Excel (97 98 2000 XP)
- 4 そのほか、お使いになるソフトは ( )  
( )
- 5 インターネットを見るブラウザは (Internet Explorer 4 5 6)  
(Netscape 4 5 6 7)  
その他 ( )
- 6 インターネットを使うとき、速度はどうですか。「速い・満足」を5とし、「遅い・不満」を1とすると、どのくらいでしょうか。  
(5 4 3 2 1)  
満足 不満



**Towards Providing Long-Term Support System for Japanese  
Language Education  
in Russian Language Sphere  
-From a foundation survey conducted in  
Moscow, Almaty, and Vladivostok—**

**INAGAKI Shigeko, DOI Mami, NAKAYA Shinsuke**

A field survey was conducted in September this year to ascertain the current needs of Japanese language education in Russian speaking areas, with the aim of examining the substance and means of support required to meet those needs. The survey was undertaken in three cities: Moscow, Almaty, and Vladivostok, and consisted of interviews with persons involved in Japanese language education in nine departments at seven universities. Due to historical circumstances, as well as to the fact that the Russian language is used in their respective areas, Japanese language teaching in these cities has largely been lumped into one category under the rubric of "Japanese language education in the Russian language sphere." However, the results of this survey have established that, depending on the region, and, even more, on the institution, there are differences in learners' motivations and in the environments in which Japanese is used. Thus, there are vast differences, as well, in teaching methods, in ideals and teaching objectives on the part of teachers. As the next step of this research, we hope to conduct further analysis and investigation into the maintenance of Long-Term Support System which takes into account the differences between the respective locals and institutions, using the results of this survey as a reference point.